

「語られたこと」と「語られなかったこと」

——序文に代えて——

ウエルズ恵子

立命館大学国際言語文化研究所に所属するヴァナキュラー文化研究会では、2009年度から2010年度にわたる二年間、研究所提案型萌芽的プロジェクト研究助成金とサントリー文化財団研究助成金を受けて、「語りえない人々の語りに関する超域的研究」をテーマに共同研究を進めてきた。人の語りのほとんどは、〈語れないこと〉や〈語ってはならないこと〉のすきまを縫って発生している。「語りえない人々の語り」という矛盾したものの言いは、あるいは単なるレトリックに聞こえるかもしれない。しかし、口頭の言語表現を含む大きな意味での文学の長い歴史を概観すれば、説明できない立場の者が容易に語りえないものを表現することによって、聴衆や読者の感動を生んできたことが観察できる。何らかの禁忌抑制のため説明できない種類の事柄が直截な表現を迂回して言語化されるとき、むしろ表現が豊かになることもある。神話や民話や歌謡や詩は個人の語りとは異なる枠組みでの語りであるし、造形芸術や祭祀儀礼なども説明的な語りを避けた語りの別様式であると思われる。そのように意味を拡大していくと、全ての人間表現が「語り」の範疇に含まれ、大袋に入ったこの「語り」こそが、私たちが研究対象とするヴァナキュラー文化である。そして今回のプロジェクト研究では特に、〈あるがままの語り〉という見方に対する疑いを出発点とし、〈発生した語りの背後に黙しているもの〉に強い関心を払いながら、語りの本質を考察しようとした。

私たちは、文化の生成と継承において「語られなかったこと」を「語られたこと」と同じく重要だと考えた。それは、時の権力構造や社会や文化のひずみと関わるために、語られなかったことが人間存在の本質を示唆するからである。したがってこの研究では、発話されたり表現されたことと同時に、黙したり隠されたこともまた分析の対象とした。もちろん、ゼロないしはマイナスの語りに近づくためには、語られたことを注意深く探る必要がある。その作業はまるで、知覚できるものと私たち自身の未知の部分との対話であり、この対話の先に複層的な語りの本質——人間はあらゆる工夫をして他者に語りかけたい——が立ちあがって見えてきたのである。だからこの研究の目的は、あるがままに語りえない人々の現実を見つめ、多分野の研究方法によってそれを分析することにより、発話する主体と黙する主体を取り巻く社会現実を、複眼的に明らかにすることである。そして、〈迂回した語り〉と、集団的または個人的な傷からの回復構造との関係を明らかにし、現代社会における平和的共生の可能性にむけて新たな発見を試みた。各研究者は、自分の専門領域を生かしながら上記のテーマに取り組み、成果としておおまかに三つに分類できる研究論文がそろった。声を基本にした語りかけを扱ったもの（小長谷、ウエルズ、佐藤）、メディアと語りの問題を扱ったもの（荒、関口）、歴史的記憶と記録

を扱ったもの（田中，江川，プロイノウスキー）である。本研究では，語りと意味の問題も言語学の立場からとりあげたが，これについては立命館言語文化研究22巻2号（2010年11月）で別個に小特集「グローバリゼーション時代の日本語：その感性と活力」を組んだことを付け加えておく。

この紀要特集を準備していた2011年3月11日に東日本を巨大な地震と津波が襲い，福島原子力発電所の「想定外」の事故も追い打ちをかけて，4月の新学期を目前にしながら，日本から世界へと重く不安な雲が漂っている。報道されることと現場のギャップ，口に出せることと出せないこと，記憶したいこととすぐにも忘れてしまいたいこと。今まさに，人々の中に正と負の語りが交錯している。今回のプロジェクト研究の成果を，つねに変動する社会と関わりながら同時代的な視点で応用していきたいものだと痛切に思う。（2011年3月20日）

冒頭述べたように，本研究は以下の研究助成金の援助によって遂行された。この場をお借りし，深く感謝の意を表します。

2009年8月－2010年7月 サントリー文化財団研究助成金

2009年度，2010年度 立命館大学国際言語文化研究所提案型萌芽的研究プロジェクト助成金